

中田眞城子

mplusplus (株)

## 編集昔ばなし

これまでいろいろな仕事をしてきたが、一番長いのは編集という仕事だ。このコラムを書くにあたり、すっかり忘れていた自分の編集歴を思い起こすことにした。

初めてかかわった誌面は大学時代まで遡る。大阪市大と家が近かったので、家政学部の教授の本を整頓するアルバイトをしていた。数日間の手伝いのはずだったが、私が美大に通っていることを知った教授から、自分が立ち上げた協会の編集部に行きたくてと言われた。その編集部では、原稿の余白に入れる小さなカットまでプロに依頼していた。カット1枚の金額が編集アルバイトの日給と同じだったので、私が編集作業の合間にカットを1日1枚描いたら経済的という発想から誘ったようだった。

当時の編集の仕事は今とはまったく違い、企画が決まったら、まず執筆者に依頼内容を伝える手紙を書き（それも手書きで）数日後に電話で返事を聞く。承諾なら原稿用紙を郵送した。原稿は近隣なら取りに行き、遠方なら原稿用紙を送る際に切手を貼った返信用の封筒を一緒に送った。原稿が届くと直に鉛筆で書き込んで校正した。達筆の原稿は、写植屋さんに読めないと言われるので一から書き直した（なんと悠長なこと）。そういえば、ある日編集長が突然いなくなった。理由は教えてもらえなかったが、業界、もしくは特定の会社との癒着があったのだろう。その日から、何も知らないのに私が中心となって編集をした時期があったような気がする。

卒業してからは別の仕事に就いていたが、一時期無職になった。30歳を過ぎて子どもがいると再就職は奇跡に近く不貞腐れていたから突如ある編集部から連絡があった。美術欄担当者が音信不通になって誌面に穴があきそうだという。当時、携帯やスマホがなかったので家を訪ねて不在ならば本人に連絡する術がない。10年ぶりの編集作業だったが次の日から仕事に行った。すでに郵便でのやりとりは廃れ、依頼も原稿も校正紙の送付もFAXのやりとりが変わっていた。そうこうするうちに原稿はワープロで打たれ、次にMS-DOS形式に変換されフロッピーに収められるようになっていった。インターネットはまだ有効に使われておらず、検索しても新鮮な情報はなかった。というか自分たちがネタを提供する方が多かった。だから、個人がどれだけ人脈や情報網を持って

いるか、あるいは何かに精通していることが編集者の前提だった。

ある日、男女雇用機会均等法が制定され、女性求人誌が刊行されてから私は突如忙しくなった。全戸配布の市報や公共性のある印刷物のコンペで、子育て中の働く女性がかかわっていると通りやすいというバイアスができた。賃金も平等な上、比較的女性が働きやすい編集の仕事でも、現実には子育てしながらの女性は少なかった。仕事を取りたい代理店や印刷業者から指名があった。それまで多くの企業で女性の役目は「男性社員の補助」であり「華やか」で「お茶汲み」ができればそれでよかったのに社会の変わり目を体感できたことは貴重だったと思う。

しばらくして男性編集者とデザイナーとイラストレータの4名で会社を設立した。ちょうど写植が姿を消しデータ入稿に変わりつつある時期だった。独立の際、ワープロからMacintoshに乗り換えた。まったく理解していなかったが「教えるから」と言った仲間のデザイナーの言う通りに、大枚はたいて1MBを4MBに拡張もした（なんとこれで最大拡張だった）。すると、何もしなくても仕事が入ってきた。当時デザイナーの多くはMacintoshとMS-DOSの互換性の悪さに悩まされていて、つまりMacintoshを使っているというだけで仕事が貰えたのだ。

仕事は順調だったが阪神・淡路大震災をきっかけに会社を離れた。情報発信について思うところがあったのと、子どもとの物理的な距離に恐れがあったことと半々だった。出始めの携帯電話を持っていたので仕事は受けられたが私は迷っていた。多くの人は印刷物の方が信憑性が高いと感じているが、実際はコンピュータに入力した時点できあがっている。もやもやした気持ちに決着をつけられず、結局編集という仕事を辞めてしまった。その後に出会った新しい仕事はどれもこれも面白く、あっという間に十数年が経ったのだが、ここに来てIT最先端の学会がなぜか出版し続けている紙媒体にかかわることになった。一体、私に何ができるか考え始めているところだ。

さて、次のリレーコラムはその「情報処理」編集委員会を誰よりも長く見続けてきた事務局の後路啓子さんに初期からこれまでの一部始終を暴露してもらいたい。